

安藤忠雄著「仕事をつくるー私の履歴書ー」日本経済新聞出版社 2012年3月11日刊を読む

1. 東日本大震災 今こそ日本が一丸に 潔さ・粘り強さで難局打開

- (1) 東日本大震災で旧知のとび職の親方、鈴木恵一が亡くなった。直後から宮城に住む彼の安否を確かめようと何度も連絡したが、返事はなかった。新聞の死亡通知欄に「七ヶ浜、鈴木恵一(55)」の名を確認し、やっぱりと、肩を落とした。
- (2) 出会いは 1987 年。東北博覧会でパビリオンを一緒につくった。足場工事用のパイプで建築をつくる前例のない計画に、「この仕事はおれに任せてくれ」と一言。その言葉通り、十数人の職人を引き連れ、困難な工事をやり遂げた。高さ二十メートルの足場に乗っている人たちは揺れていた。それでも問題を次々解決し建築を立ち上げていく。職人の誇り高い姿に感服した。あの、屈強な鈴木さんが津波にのみ込まれた。
- (3) パイプの建築を後に浅草の下町唐座として再構築した時も、駆けつけてくれた。めったに会わなかったが、いつもしゃきっとして、職人の美しさと強さを感じさせ、日本人特有の協調心と忍耐力を持っていた。災害の中、多くの人を助けようと無我夢中で働くうち命を落としたのではないか。
- (4) 今回の震災は想像を絶する被害をもたらした。地震、津波、原発事故と災害は連鎖し、今も見えない不安が日本中を覆っている。とてつもないエネルギーの前に、なすすべもなくすべてが破壊されていく映像を目の当たりにして自然に対する人間の無力を思い知らされた。
- (5) 今こそ、国は非常事態宣言を発令しなければいけない。国民全員が、全力で被災地の人々を支えるべきである。報道される被害状況は刻一刻と変化している。そんな中、何日も家屋に閉じ込められ自衛隊に救出されたおばあさんが、迷惑をかけたと謝罪し、丁寧に礼を述べる姿や、自分たちが頑張らねばならず故郷を復興させると声をあげる被災地の子どもたちの姿に涙が出る。
- (6) 私は現在、アジアで多くの仕事を手掛けているが、大震災の直後、中国、韓国、台湾などのクライアントから義援金の申し出を受けた。「どこに送ればいいのか」と連日のように問い合わせがくる。役立ててほしいと、高額の小切手を送ってきた人もいる。彼らは同じ人間として救いの手を差し伸べているのである。
- (7) 近代以降、日本とアジアの間ではぎくしゃくした関係が続いた。よく考えてみると、日本には、こちらからアジアを見るという視点しかなかったためではないか。それも、上の方から見てきたように思える。最近でこそ違ってきたようだが。
- (8) これからは、アジアから見ると、日本はどう見えるのかということをもっと考える必要がある。私も、仕事を通して「アジアはひとつ」「地球はひとつ」を実感している。お互いに助け合い、支え合いながら新しい世界をつくるべき時を迎えている。
- (9) 多くの国々から救いの手が差し伸べられる一方で、市場は日本の状況を静観している。震災への対応は、日本という国の信用問題にもかかわる重大な問題だ。

(10)かつての経済大国としての勢いは陰り、存在感が薄くなっていた日本に、さらに襲ってきた大災害。だが、私たちには、1945年の敗戦から見事に復活を果たした、潔く粘り強い国民性がある。今こそ、一丸となって厳しい現実に向かわなければならない。それは、日本の存在感を再び世界に発信することにもつながるだろう。

## 2. 日本 人間性育む教育に未来 実直な国民性・創造力の回復を

(1)国際社会で先頭を切って走ってきたはずの日本はいま、存在感を失い、国際化の波に乗れず将来像がつかめない。

(2)震災と原子力発電所の事故以来、曖昧な発言を繰り返し、正しい事実を国民や海外のメディアに伝えないわが国の政治家たちの言動には、アメリカのCNNやフランスのメディアの記者たちは、絶望に近い感想を述べている。

「こんな曖昧でいい加減な発言を続けていては、日本人同士ならまだしも、海外では記事にすることもできず、日本は世界から孤立し、その存在を忘れられていく」という発言に私は戦慄した。

(3)21世紀、世界情勢は大きな変化の波の中にある。しかしわが国では教育はいまだに一律で、政治には信念がない。そこに追い討ちを掛けるかの大地震がおこった。人間の力の全てを打ちのめすほどの地震と津波が我々を襲った。我々は暴れる自然の猛威にただ呆然とたたずむ。

(4)こういうときこそ一人一人が自分に何ができるのかを自らに問わなければならない。これまで日本人は歴史上二度の奇跡を起こした。そして今ふたたび奇跡を起こし、何としても我々は日本を復活させなければならない。

(5)本来、日本人の国民性には素晴らしいものがあると思っている。自身の経験からしても土木・建築の技術力や、スケジュール・品質・安全衛生の管理能力は世界のトップレベル。他の分野でも繊細で緻密、探究心が強く勤勉である。それらは海外からも高く評価されてきた。

(6)過去の奇跡の一回は明治維新のとき、幕藩体制から近代国家を一気につくったこと。その素地は三百を超える諸藩の教育体制である。現在の一律な教育制度とは異なり、藩ごとの特色が打ち出され、学ぶ人の目的と個性を考慮した教育が行われた。この熱心で柔軟な教育によって輩出した人材が新しい時代の扉をこじ開けた。

(7)第二の奇跡は太平洋戦争の敗戦後、数十年の間に復興し世界有数の経済国にまで発展したことだ。廃墟と化した地で大人たちが寝食を忘れて働き、子どもたちが元気に目を輝かせる姿を見て、海外から訪れた人々は「この国は必ず復活する」と口を揃えたという。しかし「経済大国」と謳われ始めた1969年頃から、日本人の実直な国民性が色褪せてゆく。私が建築家として仕事を始めたのも、丁度この頃だ。1970年の三島由紀夫の割腹は、今思えば以降の日本人の精神の凋落を予想し警鐘を鳴らしていたのかもしれない。

(8)人々は考えなくなり、闘わなくなった。経済的な豊かさだけを求め、生活文化における本当の意味での豊かさを忘れてしまった。

(9)未来を担う子どもたちは親の意思で知識を詰め込む塾に通わされ、創造力を養うための貴重な時間を失っている。本来子どもは友達と自由に、自然と戯れながら遊ぶ中で、好奇心を育み、

感性を磨き、挑戦する勇気や、責任感を養うものだ。今、子どもたちは親の敷いたレールの上を走ることに精一杯で、過保護に育てられている。自分で考えるという体験が絶対的に不足しており、緊張感も、判断力も、自立心もないまま成人し、社会を支える立場に立つことになる。

(10) 正しい価値観で物事を決めることが出来ず、国際社会で立ち遅れている今の日本と、子どもの教育を取り巻いてきた状況は決して無関係ではない。

(11) 中でも 1970 年以降に大学の入試制度の改善が検討された結果、1979 年に教育の現場に取り入れられた、共通一次試験や大学入試センター試験の制度は、もともと目指した大学入試の競争を緩和するどころか、受験産業の介入と偏差値による受験生の選抜と、大学の序列化をさらに増長した。数字にのみ、若者の能力を置き換え、本来、多くの可能性をもつ年代の学生をマークシート方式の試験で単純に優劣をつける受験戦争が、わが国の活力を奪ってしまったともいえる。国家の活力と教育は大いに関連性があり、この受験体制を根底から変えていかなければ、この国にふたたび光が見えないと私は考える。

(12) 私は大学の教育を受けていない。自分で生きる力を身につけなければという思いを人一倍強くもってきた。だから自分の意志が希薄で、人と直接ぶつかり合おうとしない、芯の弱い若者や子どもたちをみていると、日本の将来に強い危惧の念を覚える。

(13) 人間性を育む教育を行い、自分なりの価値観をもった『自立した個人』をつくり、家族や地域への愛情をもった日本人の国民性を回復しなければ、未来は見えてこない。

(14) 彫刻家、カミーユ・クローデルを姉にもち日本の美術に興味をもっていたが、1921 年から 7 年間、駐日大使となって、更に日本文化に深い理解を示したフランスの詩人のポール・クローデルは、同じく友人のフランスの思想家で詩人であったポール・ヴァレリーに「私はこの民族だけは滅びて欲しくないと願う民族がある。それは日本民族だ」と話していたという。その日本はいま、存亡の危機を迎えている。

(15) 東北地方にあれだけの犠牲者を出した今こそ、第三の奇跡をおこすべく、日本は真の意味で変わらなければならない。

(16) まず飼いならされた子どもたちに野性を取り戻させたい。野性を残した子どもたちが知性を身につけ、自らの意思で世界を知り、学べば、日本を生まれ変わらせる可能性をもつ人材が育つだろう。この国が再び生き残るには技術革命より、経済より、何より自立した個人という人格をもつ人材の育成が急務である。

(17) 真の人格を育てる教育にこそ劣化した人間と国家の再生がかかっている。

P240 ~ 248

[コメント]

建築家 安藤忠雄先生から現代日本社会への本音のメッセージ。このような本音の話を日本国中で行ってはじめて「福島」は日本国となる。「本音」の議論を忘れてはならない。

— 2012 年 9 月 7 日 林 明夫記 —